

編集後記

今月号は主題とその関連座談会を含めて、ヒスタミン H_2 受容体拮抗薬（以下 H_2 -B と記す）をめぐる議論が紙幅の多くを占めた。本誌が特定の治療薬剤を取り上げたのは異例のことである。それほど H_2 -B は、今やわが国においても非常な関心が持たれている。医学の歴史を眺めると、 H_2 -B もまたやがてブームが去り、反省期、冷却期という経過をたどっていくのかもしれないが、ここ当分は消化性潰瘍の薬物療法の主役を演じていくであろう。

主題の執筆者、座談会の出席者はいずれも自分の考えを持ち、経験も十分なつわもの揃いであり、読者も読みごたえがあったと思う。ただ、読み終わってみてどのような感想を抱かれたであろうか。ずいぶん良い潰瘍の薬が出たものだと感じた人もいる反面、 H_2 -B もまた潰瘍症の自然史を変えうる薬ではないのだということを、改めて思い知らされた人も多かろうと思う。潰瘍患者（潰瘍を持った人間）の治療という観点からすれば、いかなる抗潰瘍薬もおのずからその限界と位置づけがある。それを思えば H_2 -B の有用性の現状はむしろ当然の結果であり、今後ともあまり期待しすぎるのはどうかと思う。もうこれ以上は言うまい。

<並木 正義>

いずれにしても H_2 -B の潰瘍に対する治癒促進効果は優れたものであり、潰瘍治療薬としては一時代を画するものと言ってよい。これを潰瘍（特に潰瘍症）の治療に生かして用いるには、具体的にどうすればよいかが今後更に検討を要する研究課題である。この点については本号でもある程度示されてはいるが、まだまだの感がする。

<編集> 早期胃癌研究会